

Z105a 山口県文書館所蔵資料にみる近世天文古記録

松尾 厚 (元山口県立博物館) , 山崎一郎 (山口県文書館) , 岩村和政 (山口県立博物館)

古文書に残る天文記録は、天文現象に対する当時の人々の関心や捉え方、天文現象と社会の関わりなどを示すだけでなく、藤原定家の日記「明月記」における超新星の記録に代表されるように、時として現代天文学に大きな貢献を果たす資料ともなる。山口県文書館(もんじょかん)では、長年にわたりその所蔵資料に記録されている天文現象の収集を進め、2025年3月にその成果を「山口県文書館所蔵資料にみえる近世天文関係記事」(山崎一郎, 2025, 山口県文書館研究紀要第52号)として公表した。

山口県文書館(もんじょかん)では、所蔵する膨大な江戸時代の古文書(藩庁文書・庄屋文書等)等の中から、日記や年代記など天文記録を含む可能性が高いものを選んで網羅的な調査を行い、15の資料から1680年(延宝8)から1862年(文久2)までの天文記録、約80件を発見した(一部大気現象等を含む)。その成果は2025年3月に「山口県文書館所蔵資料にみえる近世天文関係記事」(山崎一郎, 2025, 山口県文書館研究紀要第52号)として公表している。今回の発見数は、「近世日本天文史料」(大崎正次, 1994)及び「続 近世日本天文史料 暫定版」(渡辺美和, 2007)に記載されている山口県内の天文記録数をはるかに上回るものである。

その後、我々はこれらの天文記録の精査を続け、実際の天文現象との同定作業を進めている。未だ同定できていない記録も多いが、彗星と思われる記録が全体の約半数を占め(大崎1994+渡辺2007でも記録数の首位だが、割合は全体の4分の1)、日食、流星の記録が続く。流星痕や星食、白昼の星などの記録、流星雨とも思える記録などもある。大崎1994+渡辺2007の記録では全体の2割(記録数の2位)を占める月食の記録が皆無であるが、その原因ははっきりしない。本講演では、これまでの調査状況の概要と興味深い記録等について報告する。